

周波数を合わせる

新年度が始まり早1ヶ月が過ぎました。私は新年度を迎えるに当たって、いくつかの目標設定を致しました。その中の1つは具体的に、『日蓮宗大修行壱百日間無事成満を目指す』というものであります。これは既にご存じの方も多いのではないかと思います。11月1日〜2月10日までの調度、百日間、山に籠もり修行をします。睡眠時間は毎日2時間、食事もし訳程度の重湯（お粥の薄いもの）とみそ汁が2度。そして何よりも大変なのが、真冬の雪が降り積もる極寒の中、真っ裸になり、水をかぶらさずして頂くことでもあります。その様に身を清めたら本堂に上がり、お経を読み続けます。今回私は再行（2回目の修行）ということなのですが、前回の平成12年度に入行した時には、大変哀れなことですが、同輩の僧侶が厳しさのあまり体を壊し、当然病院になんかも行きませんので、無理をしてそのまま帰らぬ人となりました。生と死を行ったり来たりする様な、それ程の修行を何故しなければいけないのか？疑問に思われる方も多いのではないのでしょうか？

で、特に行かなくても問題はないのですが。しかし人は、自分の体験を通して作った器でしか、他者の苦しみや悲しみの本質を推し量る事が出来ませんよね。

苦しい行を通じて人の苦しみを自分の苦しみとするのです。人の苦しみを自分の悲しみに、人の喜びを自分の喜びにできる精神を作り上げていくのです。人の心が分り、人の為に生かしてこそ初めて「行」と言えるのです。つまり他人と自分が『同悲・同苦』を通じて分かり合える様になる為なのです。しかしこの『同悲・同苦』も、修行に入らなければ分らないものなのでしょうか？答えは「NO」です。こんな話があります。

家が貧しい為に修学旅行へ行けない子供の話が、ある新聞の投書欄に掲載されました。するとその家に差出人不明の封筒が届き、中には「貧しさに負けず、楽しい修学旅行を」と書かれた手紙と現金5万円が入っていたと言います。受け取った家族は全く心当たりがなかったのに警察に届け、この話は公になった。当の新聞社が送り主を探し当てたところ、送り主は大阪のメリヤス工場に出稼ぎに来た20歳の女性と判明した。彼女は気まぐれから、または同情心から見ず知らずの人にお金を送ったのではありませんでした。少

女時代を貧困の中で過し、自身もまた修学旅行に行けなかった経験から、他人事と思えず、その子の悲しみに「同悲」したのです。遠く故郷を離れ出稼ぎに来たことを考えれば、そう高い給料を貰っているとは思えない。その大半は両親への仕送りだったかも知れない。それでも万一の為に貯金していたお金を見ず知らずの子に送った。これこそまさに「同悲・同苦」の精神です。勿論彼女は、私達行者の様に修行を行っていたわけではない。彼女の貧しい少女時代がメリヤス工場で必死に働く生活が「行」だったのです。「貧すれば鈍す」と言うように、辛く苦しい生活が心をささくれ立たせる事もあります。しかし環境を素直に受け入れ、自分の与えられた持ち場で懸命に働くこと、身口意、則ち身体と言葉と心をフル回転させることが心を鍛え、行に繋がるのです。一生懸命働く、そうすればどんな職業であろうとも、他人と同じ境地に達する事が出来る様になります。

思えばお釈迦様、日蓮大聖人、各宗派の開祖、マホメットにイエス・キリスト等、皆の幸せを願って生きた人々の魂は、何百年、何千年と受け継がれ、今なお人々の心に息づいています。

私達人間は「人の上に立ちたい・地位や名誉や財産がもっと欲しい、もっ

ともっと」と。ふつう人は目標や夢を設定して、上へ上へと目指していきます。しかしその目指す所といえは大半の人は結局『人の上へ』であります。それはそれで悪い事ではないのですが、私達は一体何を、本当に成していかなければいけないのでしょうか？それらは人それぞれなのですが、肉体の寿命はどんなに頑張ってもせいぜい百年。その後の精神の寿命を決めるのは生前どのくらい多くの、そして大きい責任を持つて生きたかにかかっています。それはどれだけ、『人の下へ、下へと向かって生きられるか』という事でもあります。下へ下へと向かわれる方には仏様達と同じ気持ちになることが出来ます。それはあたかも、ラジオの周波数を合わせるようなものです。気持ちに近づくとはそういう事です。

中国の格言『七変化』・「心が変われば意識が変わる。意識が変わると態度に出る。態度が変わると行動に出る。行動が変われば習慣になる。習慣になれば性格が変わる。性格が変わると人生が変わる」

習慣が、今日1日が、人生を作っていくのです。

副住職 谷川寛敬
合掌